

禅宗と日本資本主義論の成立についての研究 —鈴木正三の思想と「日本資本主義の形成」の関係について—

島 田 裕 司*

The Study on the establishment of Japanese capitalism and Zen
The relationship between the idea of Shosan Suzuki and "the formation of Japanese

Yuji SHIMADA*

Abstract

Shosan Suzuki is in the early Edo period of Zen. Professional ethics he preach in the "all people value pack (Bannmin-Tokyo) ", asceticism occupations view, the evaluation of and are leading to occupational outlook is a Protestant occupational outlook of modern Western initial stage, it had been made up to now. And there there is a freedom of spirit, the work ethic is modern, rational, many religious scholars, including the Buddhist scholar Hajime Nakamura as capitalist spirit can be seen, historians, from such as comparative literature's is evaluated, this thinking format has been said to be have been form the headwaters of the capitalist development of Japan.

However, awareness of Shosan Suzuki in the field of economics that would study originally capitalism is low, also when viewed from the previous studies of the economics related to capitalist development, and Suzuki of thought has brought capitalism to Japan to be, it may require much verification studies was found.

To begin with, in the paper by non-economists of the past, about what is "capitalism", study but had not been made, in order to the controversy, the definition how something like What is "capitalism" there is a need.

In economics with respect to the cause of the establishment of capitalism there is a variety of opinion, but on whether to adopt a degree of opinion, theory of Shosan

Suzuki found that there may be a even likely to be irrelevant to the capitalist development of Japan did.

In any event, incorporating the results of economics, there is a need to re-evaluate the Shosan Suzuki on it.

*駒沢女子大学 非常勤講師

1. 初めに

非西欧諸国の中で日本だけが、近代産業国家として自らを変革するために、西欧文化から必要とするものを吸収し、近代化に成功した。明治維新である。その原因として、江戸期における社会・経済制度の進展・充実、寺子屋などによる高い教育力をもたらした人材の層の厚さと並び、日本人の独特の「思考様式」などに着目し、これまで多くの研究がなされた。

このうちの「思考様式」に関する研究としては、禅僧・鈴木正三(天正7年～明暦元年(1579年～1655年))にその源流を求める視点から、これまで多くの論文が発表されてきた。

これらの研究の特色としては大なり小なりM.ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の影響を受け、プロテスタントに対峙すべき日本の「思想様式の源流」に鈴木正三を位置づけて¹、論理を展開している点が挙げられる。

ただし、これまでの研究は主として、宗教学、社会学、歴史学及び評論家等からによるものが大半で、経済学(経済思想、経済史及び経済哲学等)からのアプローチは非常に限られているように思える。

本小論は、これまでの「日本資本主義の形成の思想的源流としての鈴木正三論」とでもいうべきこれまでの見解を俯瞰するとともに、いわば「和製プロテスタンティズムの精神と資本主義の精神」としての禅僧・鈴木正三論の影響が、経済学の視点から見ても支持されうるための条件について整理するのが狙いである。

2. 先行研究

鈴木正三は、江戸初期(天正7年1月10日(1579年2月5日)～明暦元年6月25日(1655年7月28日))の旗本であり、禅僧(曹洞宗)であり、仮名草紙の作家でもあり、多方面において活躍したことで知られている。その広い活動領域を反映し、鈴木正三に関しては明治以降多数の研究があるが、大きく分

けて4つの視点からなされている。² その一は江戸文学(仮名草子)研究に於けるものであり、その二は日本近世史(宗教、思想、文化)研究に於けるものであり、その三は日本思想史(倫理思想史)研究におけるものであり、その四は仏教(禅)思想研究に於けるものである。

本小論は、その二、および三の視点に属するものである。そして、そのうち鈴木正三の思想が「日本資本主義形成に与えた影響」について考察することを目的としている。その中でも、M.ウェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」において、宗教(プロテスタント)が資本主義成立の契機となったように、日本の明治維新以降の資本主義の発達は、鈴木正三の思想と強い因果関係を求めるか否かについての観点からの研究を直接の対象となる論文を先行研究の対象としている。

この分野に関しても多数の研究論文が存在する。これらの研究論文を踏破し、体系化した論文としては、小笠原眞の『「日本の近代化と禅宗」再考―特に鈴木正三にみる「日本資本主義の精神」論をめぐって―』がある³。そこでまず小笠原の論文を基にして、鈴木正三に対するこれまでの主な研究を整理してみる。

小笠原は、鈴木正三を「日本資本主義の精神」に対する影響に関し大いに寄与したか否かの視点に立つと、以下の三分類に分けられるとしている。

- (1) 肯定論
- (2) 否定論
- (3) 折衷論

この小笠原の分類に沿って、鈴木正三の評価の概略を俯瞰⁴する。

- (1) 肯定論

「日本資本主義の精神」の思想的源流を鈴木正三に求め、M.ウェーバー説を論駁すべき見解を積極的に支持する人びとに、仏教学者では中村元、藤吉慈海、末本文美士をはじめとして、仏教史研究者の大桑斉、経済学者では大野信三、神谷満雄、堀

出一郎、保坂俊司、文明批評家の山本七平、そして社会学者で文明批評家でもある小室直樹等々枚挙にいとまがない。⁵

中村元は「日本仏教における資本主義精神」や「鈴木正三の宗教改革的精神」といった論文において「日本の近世初期においても、もしもそれが発展したならば当然資本主義精神となりえたであろうところの仏教運動を認めることができる。それは禅僧鈴木正三の唱えた職業倫理論である⁶」と主張しそこでは日本の限界を認めた上ではあるが、正三の職業倫理の提唱に注目する。

また、彼は正三の「修行之念願」、「三宝之徳用」、「四民」の三段からなる『万民徳用』（寛文元年、1661）を取り上げ、特に禁欲主義的な「四民」の職業観、すなわち武士日用、農民日用、職人日用、そして商人日用の思想には、近代西洋におけるプロテスタンティズムの職業観、つまり各自の職業を神の「詔命」によるものとして神聖化し、尊重する考え方に通じるものと認識する。

さらに、正三は「封建社会における階位的身分倫理をいちおう肯定し、各人の身分・貯富の程度・寿命は先世の因によってすでに定まっている」として、ある意味で「決定論」（Determinismus）を承認しながらも、全体としては既成教団への批判や真実の自己による「自由」の精神があり、その労働論には近代的性格・資本主義的精神が見出され、またキリタン批判にも仏教的合理主義の思想があるとして、正三を代表的な近代的思惟の持主である⁷と中村は解し、高く評価したのである。

大野信三は『仏教社会・経済学説の研究』（1956年）において「鈴木正三は……明快な法語や談話を通じて、諸法無我の真理を把握しえて、無碍の大自在人となり、この境地で各人がその職分に精励するところにこそ救いがあるゆえんを力説した。その際正三は、ほとんどカルヴァン流に、世俗的な職業活動を宗教的に合理化して、商人による利潤の追求を積極的に是認すると同時に、利潤をえても、これをみ

ずから享樂することなし資本蓄積にまわすべきことを示唆することによって、日本における資本主義の精神の基底を形づくるという役割をはたした⁸と主張する。

山本七平は『日本資本主義の精神』（1980年）という著書や『勤勉の哲学』（1979年）のなかの「鈴木正三と日本的資本主義の精神」といった論文で、「日本的資本主義」の精神的源泉を求めるとすれば、それは日本の伝統に求むべきである。その精神的基盤を明らかにしている者として、まず正三をあげべきである。その発想の基本は農人日用に現われているが、他にも共通する大きなすなわち特徴は「世俗的行為は宗教的行為である」という発想であろう。いわば「農業則仏行なり」「何の事業も皆仏行なり」である。なぜなら、「士農工商」といった分業は「本覚真知の一仏、百億分身して、世界を利益したもう」ためであり、各人は「先世の業因」でその位置に生れて来た責任があるのだから、武士は秩序維持、農人は食糧、職人は必要な品々の提供を、商人は流通をそれぞれ担当するのが宗教的義務になる。ということせめは一意専心それに従うことが仏行となるから、自分自身を「ひた責に責て」働かせればよく、「如レ此四時ともに仏行をなす。農人何とて別の仏行を好べきや」となって、「隙（余暇）を得て、御生願と思は誤なり」となる⁹、と述べている。

大桑斉は『日本近世の思想と仏教』で、鈴木正三の職業観を「職分仏行役人説」あるいは「職分役人説」と名づけて、それぞれの職業を天から与えられた役人とみる新知見を披瀝している¹⁰

神谷満雄はその著『鈴木正三一現代に生きる勤勉の精神一』において、西洋諸国が200年を費やした近代資本主義社会の構築をわずか100年足らずでなしとげた日本にあってその原動力となった職業倫理は源流を辿れば徳川時代初期の禅僧鈴木正三の「何の事業も、みな仏行なり」と説いた、いわゆる「勤勉の精神」に行き着く点を強調している¹¹。

堀出一郎も『鈴木正三一日本型勤勉思想の源流一』において、正三の職業倫理を「職務に精励

することが即仏道修行」に求める点では、まさに神谷の見解と軌を一にする¹²

経済学者保坂俊司は「鈴木正三思想の普遍性を巡って(その一)―『正三思想における職業聖化の思想を中心に』―」という論文で「正三思想、特に彼の勤労思想を、近代西洋合理主義思想、なにかんづく近代資本主義を支えたピューリタンの職業聖化の思想と比較し、正三思想の普遍性を検討する。そのために正三とはほぼ同時代のピューリタン思想家バクスターとの比較を試みる。つまり、両者の思想を『世俗化』という視点を中心に分析し、その共通性、あるいは普遍性を明らかにしたい¹³」ことにおく。次いで、M.ヴェーバーのいう「世俗化」(Säcularisierung)とは、宗教エリート(カトリックの僧侶)が独占し、また専有していた神の救済とそれに伴う禁欲的あるいは倫理的な生活が、一般レベルの信徒いわゆる「平信徒」にまで拡張されたことを意味する。このことは、民衆の生活が神の救済を得るために倫理的に再構築されることで、呪術的な非合理性を排除し、民衆一人ひとりが神と向かい合い、その救いを個々人の倫理的な生活によって獲得しなければならない、と彼は解するのである。

しかるに、正三の「世すなわち法則仏法」の思想も、従来の仏教思想における「仏法不異世間法」からさらに発展した職業聖化思想である。これは釈尊の世法尊重思想の再発見あるいは釈尊そのものへの回帰であったばかりでなく、それは世俗生活における生業の一切が仏行、すなわち悟りへの道となるという意味で、さらに展開したものであった。つまり、仏教における職業の聖化の思想であった。しかも、この世俗業の聖化の思想こそ、正三思想がもつ最大の特徴であり、近代西洋資本主義思想を生み出したとされるプロテスタント諸派、なにかんづくピューリタンにおける聖職思想と同様の思想である。ここに正三とピューリタンとの近代的職業観・勤労観の共通性、すなわち正三思想の普遍性を見出すことが出来る¹⁴、と述べている。

保坂は、ヴェーバーも倫理論文で重視したりチャード・バックスターを取り上げ、そのピューリタニズム思想と正三思想の比較研究をも試み、特に時代的にもまた教えの面でも共通性を有する点を究明している。(2) 否定論

末本文美士が「こうした正三の職業観に対する肯定的評価は中村元以来かなり広く定着したが一方でそれに対する批判もある。それは、正三の職業観が近代的な自由平等な職業選択の立場に立つものではなく、むしろ封建的な士農工商の身分秩序を肯定し、それを積極的に理論づけようとする性質のものではなかったかというのである。正三の思想の根底には強烈な武士としての意識があり、個人的なレベルでは死の問題への正面からの取り組みとなって表われ、社会的なレベルでは支配階層に立つ行政官的、役人的な発想を持っている。しかも、正三は徳川直属の武士の出身であり徳川幕府を絶対的に信頼し服従していた。これは出家しても全く変わっていない¹⁵と指摘する。

家永三郎はその著『日本道徳思想史』(1954年)において、「前代の佛教が武士の精神をその思想形成の素材とした如くにこの時代の佛教にも武士の思想と内面的に結びついた例がないでもない。例へば武士出身の居士鈴木正三の禅の思想の如きがそれであった¹⁶と解する。その上で『修行と云は強き心を以て修することなる間、出家よりは侍ひよきなり。其故は先、主を持て機に油断なし。常に大小を指働かし、すわと云ば云機、自ら備なり』(驢鞍橋)といふ類の法語にそれがあらはれてゐるが、しかもその正三にしても、前代の佛教の祖師たちが宗教を武士の世俗的道徳に優越せしめる出世間的立場を固守したのと異なり、俗権の権威の下にひれ伏して、封建道徳の枠の内での宗教を唱へるに過ぎなかった¹⁷と述べている。

海老津有道はその著『南蛮学統の研究』(1958年)において、正三は「隠遁者としてでなく、また當時の情眼をむさぼっていた他の仏僧らと異なり、社

会人として行動し、そして社会事象に関心を抱いたことは高く評価されて然るべきであるが、何よりも彼の時代にはまだ前期資本主義すら成熟していなかったし、もちろん近代的職業社会は形成されていなかった。のみならず正三は封建社会そのものを内包し今や露呈されつつある問題を意識していたとは受け取れないしその思想は…前自然科学的であり禅儒的観念から一步も出るものではなかった」¹⁸と述べている。

近津経史も『鈴木正三の職分仏行説について』および『鈴木正三への再考察』といった論文を書き、鈴木正三にみる『日本資本主義の精神』肯定論に正面からの反論を試みている。具体的には、近津のみるところ、正三は徳川封建体制とその倫理とを、仏教的に意義づける仕方をもって、仏教の封建体制への順応と同化とをはかったのであり、しかもその場合ですら、古来仏教にみられる伝統的な世法即仏法論を現実の体制肯定の理由としたにすぎないのである、¹⁹と述べている。

柏原裕泉も『鈴木正三の庶民教化』という論文を書き、正三の禅思想は、中世的発想に基づくものであり、それゆえにこそかえって、近世的な世俗観に対する批判も生まれ、さらに仏教本来の超俗性との結合もあって、四民に独自の超越的社会観への自覚を促すこととなるが、しかし、このことは直ちに封建制批判や資本主義的精神などを生み出すものではなかった。むしろ、正三自身の政治意識や階級思想などは強い幕藩的封建体制の是認の上に成り立つものであった。それは正三自身が集権的封建制の確立期から定着期にかけて生き、幕臣として体制樹立の一端を荷った自らの経歴に基づくものである²⁰と述べている。

(3) 折衷論

倫理思想史家今井淳は、その著『近世日本庶民社会の倫理思想』（1966年）における第2章「近世仏教と世俗倫理の交渉」で、正三の思想のなかで重要なものは世法即仏法論とそこから導き出され

る倫理思想であるとの認識の下、特に中村元の所論に対して、正三は世俗的国家権力の優越性の承認という意味では、「近代的性格」がみられると言えるかもしれないが、「正三の場合明らかに、仏教が積極的に資本主義的なものに向つてはたらかうとする意図を認め」ようとする意見は、正三の意図をあまりに過大評価する傾向があるように思われる²¹と述べている。

3. M.ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』について

前述の鈴木正三と日本資本主義の関係についての研究は、その大半がM.ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を下絵にしていると言って過言でない。即ちそれぞれの資本主義の発展には、宗教的倫理が大きくしているとのM.ウェーバーの説を念頭に置き、カルビニズムの対比概念として鈴木正三の思想（禅宗を基調としている）を位置づけて説明しようとするものである。肯定論、否定論、あるいは折衷論も、こうした理論的枠組みをもとに、鈴木正三の思想が、カルビニズムに相当する役割を果たしたと捉えるか（肯定論）、または旧体制（幕藩体制）正当化のための思想を提供したに過ぎないとみるか（否定論）、あるいはカルビニズムに近い役割も一部あるが、旧体制維持の思想としての色彩も見られる（折衷論）と考えるかの、違いとみることができる。

いずれの立場に立つにせよ、M.ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、鈴木正三の思想を考えると時の重要な文献であるため、改めてその要旨を整理する。そこで、問題となる『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において、M.ウェーバーがどのようなことを述べているのかについて、確認をしておく。

(1) ウェーバーの問題意識

M.ウェーバーが問題にしたのは、近代資本主義は「利潤追求」の営みであり、それが生まれたキリス

ト教ヨーロッパは、むしろ利潤追求が否定されていた、という点であった。中世カトリック教会では暴利の取り締まりとか利子禁止などの商業上の倫理的規制を設けており、さらに宗教改革後のイギリスやオランダ、フランス、アメリカなどの禁欲的プロテスタンティズムでは商人の暴利は最大の悪事であるとされ、厳しく取り締まられていた。

では、なぜこのようなところで近代資本主義が生まれたのだろうか。ヨーロッパでは営利以外のなものか、とりわけ営利を敵視するピューリタニズムの経済倫理(世俗的禁欲)が、逆に歴史上、近代の資本主義というまったく新しい社会事象を生み出されるさいに、なにか大きな貢献をしているのではないか、と言うのが問題設定である²²。

(2) 「天職」という概念

この問題を、M.ウェーバーは、ベンジャミン＝フランクリンを例にとり、「正当な利潤をBeruf(天職)として組織的かつ合理的に追求するという心情」が、もっとも適合的な形態として現われ、また逆にこの心情が資本主義的企業のもっとも適合的な精神的推進力となった²³と説明する。この「Beruf」とは、ルターが使った言葉で、「神の召命と世俗の職業」という二つの意味がこめられおり、われわれの世俗の職業そのものが神からの召命(Calling)だという考えを示している²⁴

(3) カルヴィニズムの予定説

「16、17世紀に資本主義の発達がもっとも高度だった文明諸国、すなわちオランダ、イギリス、フランスで大規模な政治的・文化的な闘争の争点となっていた、したがってわれわれが最初に立ち向かわなければならない信仰は、カルヴィニズムだ。当時この信仰のもっとも特徴的な教義とされ、また一般に、今日でもそう考えられているのが『恩恵による選び』の教説(予定説)である。²⁵

ピューリタニズムの宗教意識は、カトリック信徒がとらわれていた救いの手段としての「呪術」を排除した。カトリック信徒は「悔い改めと懺悔によって司祭

に助けを求め、彼から贖罪と恩恵の希望と赦免の確信を与えられる」ことによって内面的な緊張からまぬがれることができたが、「カルヴィニズムの神がその信徒に与えたものは、個々の善き業ではなく、組織にまで高められた行為主義だった。」²⁶

キリスト教的禁欲は、非行動的な禁欲ではなく、エネルギーのすべてを目標達成のために注ぎ込む行動的禁欲であり、カトリックの修道院内での「祈り働け」の生活に見られるが、そのような「世俗外的禁欲」を「世俗内的禁欲」に転換させたのがルターの「天職」の思想であった²⁷。さらにカルヴィニズム(特にイギリスのピューリタニズム)では、「神のためにあなたがたが労働し、富裕になることはよいことなのだ」(バクスターの言葉)とされ、怠惰は罪悪であり、隣人愛に反することとされるようになった²⁸。M. ウェーバーが1904年から05年にかけて『社会科学と社会政策のアルヒーフ』誌に発表した論文、この論文において、彼は、カルビニズムやピューリタニズムなどの禁欲的プロテスタンティズムの倫理が、西欧特有の現象としての近代資本主義の精神的支柱となった、と論じた。彼がとくに強調するのは、二重予定説という「恐るべき教説」の心理的影響である。これがために、信徒は、「救いの確かさ」の確証を、神から課せられた「使命」(ベルーフ)としての世俗内職業労働への専心のうちに自ら求め、非合理的衝動や欲求を厳しく自己統制し、生活を徹底して合理化するに至った(現世内禁欲)。これが経営および労働の組織的合理化をもたらしたというのである。

4. 鈴木正三の思想(万民徳用)

さて、一方の鈴木正三の思想とは、具体的にどのようなものであったのか。「日本資本主義の精神」との関連で鈴木正三の思想を知る上で最も大切なものは、中村元も言うように『万民徳用』である。

この『万民徳用』を書いたのは、鈴木正三が熊野を訪れた際に世話になった加納某という武家に、武士の日用に役立つものを書いて欲しいと頼まれて、

「武士日用」を著したのがきっかけだったとされている。その後、正三は次々に『農人日用』『職人日用』『商人日用』を著し、『四民日用』が作られた。そして、正三の死後6年後、『四民日用』と以前に書いていた『三宝徳用』『修行念願』を一つにして『万民徳用』として出版されたものである。この中で注目されている考えは、これまでの「修行即仏行」の考えを、それぞれの階級（士農工商）に当て嵌め、「職業即仏行」に昇華させた点にある。

一例を挙げれば、商人に対して書かれた『商人日用』には、次のような件がある。

「その身をなげうって、一筋に国土のため万民のためと思い入れて、自国のものを他国に移し、他国のものをわが国に持ち来りて（中略）山々を越えて、身心を責め、大河小河を渡って心を清め、漫々たる海上に船をうかぶる時は、この身を捨てて念仏し、一生はただ浮世の旅なる事を観じて、一切執着を捨て、欲をはなれ商いせんには、諸天これを守護し、神明利生を施して、得利もすぐれ、福德充滿の人となる。」

士農工商の身分制度の最下層におかれ、物を右から左に流すだけで利潤を得るなどと蔑まれていた商人たちに対し、商いに専念することが「仏教修行」だと肯定し、その結果得る利益も正当なものであると肯定しているのである。

江戸期の商人や職人たちはこうした思想を学んで、自らの仕事が単に収入を得るための手段ではなく、自己を高め世の中に 尽くす「道」であると考え、生き甲斐をもって日々の 仕事に取り組む事ができた。さらにそれが「一筋に正直の道」でなければならないという教えは、約束を守る、信用を重んずる、など近代社会の基盤の確立につながったと述べられている。

仏教学者中村元は、この著作で示された鈴木正三の思想は「職業倫理、禁欲主義的職業観であるとみなし、西洋近代初期のプロテスタントの職業観、即ち、各自の職業を神の思召命によるものとし

て神聖化するも考えに通ずるものがあるとする。そして全体としては自由の精神があり、その労働観は、近代的、合理的、資本主義的精神が見出されるとして、高く評価した。³⁰⁾

5. 万民徳用とプロテスタンティズムの倫理

中村元の述べるように、『万民徳用』の説く労働観は「プロテスタンティズム」の倫理のそれとは、共通点が多くあるように見受けられるように思える。そして中村元に限らず、これまで日本史、比較文化論、思想史、宗教学あるいは社会学などの分野において、こうした共通点、あるいは相違点についての多くの研究がなされてきた。そしてこれまでの論争は、鈴木正三の思想、その「労働観」における近代性・合理性を巡ってのものが中心であったことは前述のとおりである。

但し、鈴木正三が万民徳用で説く「労働観」が「和製プロテスタンティズムの倫理」として「資本主義精神」に通じる、あるいは明治以降の資本主義誕生に際して重要な働きをしたのではないかという問題は、資本主義問題の主幹であるはずの経済学の視点からは、検証されたものはなく、いずれも「仮説」の段階に過ぎないのである。これまで経済学においては、鈴木正三の思想が、日本の近代資本主義をもたらす源流であるという指摘は、殆どなされることがない。また鈴木正三の「職業観」が、資本主義化に寄与するものについての理論的検証もなされていない。

では、鈴木正三の「労働観」が「和製プロテスタンティズムの倫理」として、日本の近代資本主義をもたらしたとのこれまでの「非経済学分野」における諸説が、本来、「資本主義研究」の「主たる担当であるはず」の「経済学」の観点からは、どのように評価されるのか、以下に検討を行う。

6. 経済学から見た「日本資本主義の形成の思想的源流としての鈴木正三論」について

これまでの諸説に於いて、経済学の観点からは、少なくとも以下の3点についての視点が、欠落していると思われる。

(1) 資本主義についての共通認識がないこと

これまでの、肯定、否定に係わらず、いずれの研究にも共通する点として、そもそも資本主義とはどのようなものを指すのかについて、全く触れていないことが挙げられる。

これは大変奇妙な現象である。「日本型資本主義形成」に鈴木正三の思想が大きな影響を与えたか否かについての研究をするならば、まず対象となる「資本主義」とはどのようなものかを定義することから始まるのが、当然の手順であるはずである。その上で、鈴木正三の思想のどの部分が「こうした資本主義の形成」に寄与したのかについて、検証することになる。またその検証の過程では当然、M. ウェーバーの見たヨーロッパの資本主義と、日本の明治期の資本主義は同様なものなのか、あるいは異なる点はないのかについての検証も試みなければならないはずである。

しかし、肯定、否定あるいは折衷論も含めて、こうした手順は踏んでこなかった。即ち、各論者の「資本主義」についての共通認識は形成されていないことになる。

目標（資本主義）についての共通認識が無い中で、その影響についての可否を論じて、そもそも議論は成立しないはずである。さらに「日本型」資本主義なるものについても、定義はなく、論者ごとに異なる「日本型資本主義」をイメージしている可能性は高い。となると、肯定論、否定論、折衷論と分けること自体、意味がなくなかなかねないのである。

もう一つの問題は、そもそも資本主義の誕生に当たり、「近代的、合理的精神が大きな役割を果たした」ということについては、いずれの説も全く自明のこととして論旨を組み立てているが、それはM.ウェーバー

の学説に過ぎない。M.ウェーバーの学説が如何に偉大なものであったとしても、一つの説に過ぎず、しかも実際の検証を経たものではないという事実を、これまでの鈴木正三に関する研究者は、全く等閑している点が挙げられる。

資本主義の誕生については、経済学でも諸説あり、全くM.ウェーバーの理論と異なる古典的理論も多々存在する。宗教学者、歴史学者、比較文化研究科家等は、M.ウェーバーの理論こそ、唯一無二として他を振り返ることすらないが、鈴木正三が日本資本主義に与えた影響を研究するならば、こうした経済学の分野における「異論」の存在も踏まえた学際的アプローチも不可欠と思われる。

(2) 禁欲主義的職業倫理観が資本主義の発展に寄与したとの経済理論上の検討がなされていないこと

さらに「禁欲主義的職業倫理観」や「職業即仏行(Beruf)」の意識を持った農民、商人、職人は、資本主義の発展に寄与するとの考えは、経済学理論上も支持されるものであるかについての検討も必要である。

「禁欲主義的職業倫理観」は、「過小消費」につながり、有効需要の減少をもたらす。そして有効需要の不足は、資本主義発展に於いては、阻害要因になりがちであるというのが、経済理論上の一般的な帰結である。しかしこれまでの諸説は禁欲主義的倫理観と資本主義発展というアンビバレントな要素を、原因と結果の関係に位置づけ議論を展開しているが、その考えは経済理論上は、ただちに支持されるものではない。

(3) 「禁欲主義的職業倫理観」や「職業即仏行(Beruf)」は、日本人の一般の特性と言えるのかについての検討がなされていないこと

さらにもう一つ検証すべき課題は、鈴木正三が唱えた「禁欲主義的職業倫理観」や「職業即仏行(Beruf)」という属性は、江戸時代から今日まで、また社会の多くの階層に共通する日本人の特性と考

えることについてである。

諸説はこの日本人の意識構造を、社会階層的にも時代的にもあたかも「普遍的」なものとして取り扱っている。しかしその証明はない。もしこの特性が限られた時代、特定の階層だけの特性とするならば、これらの諸説は根本から存在意義を失いかねないものとなる。

7. 経済学における資本主義の主要な定義について

以上の3つの問題点につき、経済学の世界ではどのようなことが考えられてきたのかについて整理する。

まず、経済学の世界では、「資本主義」をどのようにとらえてきたのか。意外なことに、現代の経済学の中心である「近代経済学」の世界では、専ら「市場」の分析について関心を寄せているのに対し、「資本主義」そのものについては分析の対象とするケースは、極めて少ないのである。

「資本主義」を研究の対象とするのは、マルクス主義経済学者である。それは社会主義との対比において、あるいは社会主義が相克する対象としての対立概念として、「資本主義」の分析が、不可欠だからである。こうした場合の「資本主義」は、否定的ニュアンスを込めて持ちられることが多い。それでも「資本主義」とは何かということを考えると、まず、マルクスに立ち帰ることになる。

そして、「非マルクス」経済学者としては、『経済発展の理論』の中で、「イノベーション」による「創造的破壊」こそ、資本主義の本質であるとしたJ.シュンペーターの「資本主義観」は、今日でも、多くの支持を得ている³¹概念である。

そして、M.ウェーバーと同時代を生き『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と全く異なる資本主義の発展のメカニズムを示した、W.ゾンバルトの「資本主義観」も確認しておく必要があると考えられる。

さらに歴史家ではあるが「市場経済と資本主義」

の差異につき、極めて重要な分析をお行ったF.ブローデルについてもその著『物質文明・経済・資本主義』を振り返り、その資本主義像についても確認する必要があると思われる。

(1) K.マルクスの「資本主義観」

マルクスがとらえた資本主義とは、「資本(capital)」が「無限に自己増殖する価値運動である」ということである。即ち「この過程で価値は、貨幣と商品という形態の不断の交代の下にあって、その量自身を変化させ、剰余価値として、原初の価値としての自分自身から、突き放し、自己増殖を遂げる。なぜかというに、価値が剰余価値を付け加える運動は、彼自身の運動であり、彼の増殖であり、したがって、自己増殖である。価値は、自分が価値であるから、価値を付け加えるという神秘的な性質を得る。価値は生ける赤児を生む、あるいは少なくとも金の卵を生む。」³²のである。ここで大切なのは、剰余価値が労働の現場で発生することである。「だから結局、剰余価値が発生するのは、事実上、生産の場面(企業や工場)で行なわれる資本家と労働者の攻防ということにつきるだろう。こうしてマルクスの資本主義社会は、社会科学的見れば資本家階級と労働階級の凄まじい階級対立ということになる。」³³のである。

しかしこうした「資本主義」が齎す「労働観」は「主と病には勝たれず」(毛吹草)を信条とする鈴木正三の、対極に位置する「労働観」と考えられる。

(2) J.シュンペーターの「資本主義観」

「資本主義にとって最も大切なものは革新(innovation)である、革新こそが資本主義の本懐。これが絶えてなくなれば、自由市場は活力を失い、資本主義は衰退して、遂には滅亡する。この「革新」の担い手として資本主義発展の原動力となるのが企業者(entrepreneur)の存在である。J.シュンペーターの言う企業者とは、単なる会社経営者ではない。日く、旧きを破壊し、新しきを創造して、絶えず内部から経済構造を革命化する産業止の突然変異—こ

の創造的破壊(creative destruction)を担う主体こそが「企業者」である。³⁴

明治時代に入り、日本の経済は急速に発展した。その主役である多くの優れた企業家が、日本にも存在したことは異論はないだろう。しかし、J.シュンペーターの説く企業家像は、鈴木正三の説く「勤勉、節約、生活の簡素」をモットーに、宗教的な義務である職業労働に励む「四民」像と遠く隔たるものである。何よりも、「創造的破壊」は、自己の属する共同体の流儀を否定し、先人の流儀を破壊してこそ、成立するからである。

J.シュンペーターの説くように、こうした「企業家」が、資本主義発展の推進力であるとしたら、「禁欲主義的職業倫理観」や「職業即仏行(Beruf)」をモットーとする、鈴木正三の労働観とは大きく異なるものと言える。

一方、鈴木正三流の労働観を持つ人物像は「イノベーション」とか「創造的破壊」を前提とした「資本主義」ではなく、「一定の資源、技術与件のもと人々のニーズ、マーケット開発もあまり起こらないことを前提とし、そこで売べき商品を、「職業即仏行」のもとに作り続ける」「(近代経済学の)市場経済モデル」において、生息する人物像である。

しかしこうした、市場経済モデルは、経済発展モデルを包含していない。従って、J.シュンペーターの「資本主義観」を取り入れるなら、鈴木正三の思想では、肝心の明治維新における資本主義の急速な発展が説明できない。

(3) W.ゾンバルト

W.ゾンバルトは資本主義の起源は、マックスウェーバーの主張する「カルバン派のプロテスタンテイズムの精神」によるような単純なものではないと主張する。例えば16、7世紀のジェノバの貿易を代表するマオナ社はよくできた「海賊団体」であったし、オランダの西インド会社は、強奪、略奪から利益を上げていたことを、ゾンバルトは指摘する。

さらに、『恋愛と贅沢と資本主義』³⁶の中で、王侯

貴族の贅沢こそが資本主義の生みの親だとしている。中世末期の法王庁及び教会の浪費・贅沢、絶対王政時代の王朝の贅沢三昧、貴族たちの大宴会や乱痴気騒ぎ、祭典や行列。ヨーロッパの貿易はこうした贅沢が無ければ成り立たなかっただろうし、又こうした贅沢は近代まで受け継がれたとしている。その主な品目として当時のインドからフランスへの輸入はコーヒー、胡椒、肉桂、モスリン、貝殻、紅茶等いずれも生活必需品とは言い難い、嗜好品、奢侈品そのものであることを指摘している。³⁷

こうしたゾンバルトの指摘は、S.ヴェブレンが『有閑階級の理論』で述べた顕示的消費³⁸に通じるものであり、後に制度学派としてアメリカ経済学における学派に引き継がれているものである。

ゾンバルトの説も、「禁欲主義的職業倫理観」や「職業即仏行(Beruf)」的労働観とは、相容れないものであると考えられる。

(4) F.ブローデル

フランスの歴史家フェルナン・ブローデル(Fernand Braudel, 1902 ~ 1985年)は、その名著『物質文明・経済・資本主義』のなかで、いわゆる三層理論と呼ばれるものを提唱した。これは経済を「実物・物々交換経済」の層と「市場経済」と「資本主義」の3つの層からなるものとして分析していこうと売っているものである。

ここで言う「実物・物々交換経済」とは、経済の基底にあり、自給自足や物物交換によって日常の物質的生活が営まれている層である。その上に、比較的小規模な商人や生産者による、競争的な市場交換の層がある。その上に大規模な商人や生産者による「資本主義の層」がある。ここで登場する市場は、多くの場合、独占的でありまた、国家の枠を超えた大規模なシステムである。

ブローデルの理論で特徴的なのは、「市場経済」と「資本主義」を明確に分けた点にある。即ち「市場経済」とは、「透明な交換」の競争的連鎖によるもので、多くの場合の取引勘定や利益勘定に大き

な狂いを生じさせないものだった。むろん飢饉や事故や騙しあいもあるのだから、ときに大きな変動はあるのだが、それもやがては収まるタイプのものがある。

これに対して「資本主義」とは、大商人によって構成される空間である。これはリヨン、ヴェネチア、ロンドン、ニューヨークといった特定の都市に形成された。その場所は市場と市場とを結ぶ交易の結節点であり、そこに陣取る大商人は、他人を寄せ付けない閉じた密室を構成する。結節点を通る如何なる交易もこの密室の関与を必要とし、そこから彼らは莫大な利益を手に入れる。

即ち「市場経済」とは、所与の条件のもとで、日常的な取引を繰り返す活動であり、概して変化も少なく安定的なものを指すのに対し、「資本主義」は、企業が絶えず新たな利益を求めて資本を投資する「経済の拡張」を指すことになる。従って「資本主義」とは、絶えず変化を伴い、攪乱が起るものと考えられる。³⁹

F.ブローデルの「資本主義」も、J.シュンペーターのそれに近いものであることが伺える。そしてここで、注意したいのは、「経済の拡張」とは、人々の「欲望の拡張」を伴うことである。「欲望の拡張」とは、煩悩の拡大・充足の追及に他ならず、これこそ仏教の根本に対峙する概念に他ならない。従って、F.ブローデル理論から見ても、「禁欲主義的職業倫理観」や「職業即仏行(Beruf)」的労働観と資本主義の発展は、むしろ「負の相関」にあると言わざるを得ない。

以上、いずれの資本主義像をもとにしても、「四民徳用」の目指す人物像と、資本主義発展の推進役となる人物像の差異は極めて大きい。

8. 「日本資本主義の形成の思想的源流としての鈴木正三論」の経済理論的検討課題

禁欲主義的職業観の労働者(農民、職人、商人)は、低賃金でも長時間労働でもいとわぬ工場労働者を生む原動力になったかもしれない。まさにマルク

スの言う「剰余価値の生産(つまり搾取)に適合した労働者」を作り出すには有効だったかもしれない。

しかし彼等は、生産者であると同時に消費者である。こうした労働者が社会の多数を占めれば、それは「有効需要」の不足をもたらす。それにも関わらず、供給サイドエコノミクス流に供給サイドの増大に邁進しても、需要が増える保証はない。需要を増やすには公共部門による需要創造(公共投資他)や、外需にマーケットを求める(植民政策を含めて)しか方法はない。となると、いずれも「日本的資本主義」をもたらしたのは、「勤勉で低賃金、長時間労働にも不満を言わない」労働者の存在ではなく、これらの経済政策の賜物ということになる。

即ち「勤勉で低賃金、長時間労働にも不満を言わない」労働者の存在が、日本資本主義の発展に大いに寄与をしたのかについては、経済理論上の(特にマクロエコノミクス)の観点からは、必ずしも肯定されるべき命題とはいえないのである。従って経済理論の観点からしても、これまでの諸説は推論(それもあまり可能性の高くない)の域を出ていないと言える状況だ。

9. 「日本人は江戸時代以来勤勉であったか」についての経済史の観点からの課題

これまでの「鈴木正三」に関する諸研究では、暗黙裡に以下の点が前提となっている。

- (1)日本人は皆共通の思想(職業即仏業)を持っている。それは、岩崎弥太郎のように一代で一大財閥を築いた大経営者から、世過ぎに懸命な日稼ぎ人足まで、社会階層横断的な日本人としての共通する特性ともいえるべきものである。
- (2)この特性は、江戸から今日に至るまで一貫して流れている、時代を超えた特性でもある。

しかし、こうした前提も、歴史の現実の前には旗色が悪い。「職業即仏行」のはずなのに明治時代の工場では、サボリ、離職が相次いでいた。横山源之助は1889年に出版された『日本の下層社会』

で、紡績工場では、毎日1割の欠勤者があると述べている。また就業後1年で100人中80人が職を去る工場があることも紹介している⁴⁰。またその仕事ぶりは監督者が「見届けるまでナマケている」ことを伝えている。

賃金学者の孫田良平によれば、明治時代には、皆勤賞(尾去沢鉱山、東京ガス等)、勤続賞与(生野鉱山、日立鉱山等)、永年勤続表彰(八幡製鉄所、釜石鉱山、三菱長崎造船所等)、退職金(吉岡・生野鉱山)及び利潤分配性(富士紡)などの多くの賃金制度が作られたが、その狙いはこうした労働移動の抑制にあったと述べている⁴¹。こうした事例は職業を「天職」と考え、勤勉に仕事に取り組む人物像とは相矛盾する。

『万民徳用』の人物像は、どこまで日本人を代表するものなのか。日本人は「職業即仏業」の勤労観を持つことを、いずれもの説があたかも「公理」としてしまっている感があるが、実証分析を旨とする経済学の観点からは、この「特性」が「公理」ではなく「事実」であるとの確認がなされたのちに、初めて経済理論との整合性、実証分析という手順になるのである。

10. まとめ

鈴木正三の思想が、日本資本主義形成に大きな寄与をしているとするこれまでの非経済学分野の諸説は、経済学の分野にも大きな示唆を与えるものである。しかしながらこれらの非経済学分野からの提言が経済学とも手を携え、学際的研究により、日本資本主義の形成の実相に迫るためには、これまで示されてきた見解を、史実に照らしあわせ、一つ一つ事実か否かの確認をすることから始めなければならない。また経済理論の検証に耐えうるものであるかの、確認されなければならないと思われる。

これまでの鈴木正三の思想を巡る諸説は、こうした確認がなされたものはほとんどなく、大半が「解釈」の問題に終始し、いわば「神学論争」の域を出て

いない。しかし鈴木正三の思想が「日本資本主義形成に大きな影響を与えた」との命題は、極めて社会科学的命題である以上、社会科学である経済学の手法により検証を経るべき課題であろう。

一方、理論の精緻化に専らエネルギーを傾注し、思想・経済史的問題を等閑視してきた観のある最近の経済学は、こうした非経済学分野からの問題提起を受け止め、制度構築における上部構造(思想、文化、社会等)と下部構造(経済構造)の相互関係につき、再検討する必要があるものと思われる。

【注記】

¹但し、より直接的には石田梅岩に源流を求め、石田梅岩に影響を与えた思想家として、鈴木正三を位置づける論文も多い。

²加藤みち子編訳『鈴木正三著作集I』中央公論社2015年4月p18~p23の分類に従う。

³小笠原眞「『日本の近代化と禅宗再考』-特に鈴木正三にみる「日本資本主義の精神論」をめぐる-」『愛知学院大学『大学紀要』2007年9月p123-139

⁴これらの研究論文の分類及び評価は小笠原眞「『日本の近代化と禅宗再考』-特に鈴木正三にみる「日本資本主義の精神論」をめぐる-」『愛知学院大学『大学紀要』2007年9月を参考にし、筆者が要約した。

⁵中村元「日本宗教の近代性」(『中村元選集』第8巻)春秋社、1965年、145p-164p同『近世日本の批判的精神』『同選集』第7巻)春秋社、1965年、1-183p。藤吉慈海『鈴木正三』明所普及会 1982年30-35p。同『浄土教思、想の研究』668-687p。末本文美士「日本仏教思想史論考」大蔵出版(株)1993年453-482p。大桑斉『日本近世の思想と仏教』法蔵館、1989年、281-355p。同『寺檀の思想』新装第1版、教育社、1985年、149-151p。大野信三『仏教社会・経済

- 学説の研究』有斐閣, 1956年, 330-371p。神谷満雄「郷土の偉人鈴木正三の生涯と思想の核心」『鈴木正三研究集録』第6号, 鈴木正三研究会, 2003年, 144-145p。同『鈴木正三—現代に生きる勤勉の精神—』41-47p。堀出一郎『鈴木正三—日本型勤勉思、想の源流—』麗澤大学出版会1999年, 2-45p。保坂俊司「鈴木正三思想の普遍性を巡って(その一)—「正三思想における聖業聖化の思想を中心に」—」『鈴木正三研究収録』第3号 鈴木正三研究会 2000年13p
- ¹²堀出一郎『鈴木正三—日本型勤勉思想の源流—』麗澤大学出版会 1999年19-42P
- ¹³保坂俊司「鈴木正三思想の普遍性を巡って(その一)」『正三思想における聖業聖化の思想を中心に』—」『鈴木正三研究収録』第3号 鈴木正三研究会 2000年13p
- ¹⁴保坂俊司 前掲書14-18p
- ¹⁵末本文美士『日本仏教思想史論考』大蔵出版(株)1993年472p
- ¹⁶家永三郎『日本道德思想史』岩波書店1954年1954年、129p
- ¹⁷家永三郎 前掲書 129p
- ¹⁸海老澤有道『南蛮学説の研究』創文社 1958年 266-267p
- ¹⁹近津経史「鈴木正三の職分仏行説について」J 1 印度学仏教学研究』第12 巻第2号, 日本印度学仏教学会, 1964 年, 140-141p。同「鈴木正三への再考察」J 1 日本仏教』第20号, 日本仏教研究会, 1964年, 15-26 p。
- ²⁰柏原裕泉「鈴木正三の庶民教化」『大谷学報』第49 巻第2号, 大谷大学大谷学会, 1969年』1-17 p。
- ²¹今井淳 『近世日本庶民社会の倫理思想』理想社, 1966年57-58p
- ²²M.ウエーバー著。大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 1989年大塚久雄解説より
- ²³Mウエーバー 前掲書 72p
- ²⁴Mウエーバー 前掲書 397p
- ²⁵Mウエーバー 前掲書 144p
- ²⁶Mウエーバー 前掲書 196p
- ²⁷Mウエーバー 前掲書 401p
- ²⁸Mウエーバー 前掲書 310-311p
- ²⁹鈴木正三『商人日用』『万民徳用』
- ³⁰加藤みち子 『鈴木正三著作集I』中央公論社 2015年20p
- ⁶中村元「日本仏教における資本主義の精神」『日本宗教の近代性』(『中村元選集』第8巻)春秋社1965年149p
- ⁷中村元「日本仏教における資本主義の精神」『日本宗教の近代性』145-164p。同「鈴木正三の宗教的改革精神」『近世日本の批判精神』(『中村元選集』第8巻)春秋社1-147p
- ⁸大野信三『仏教社会・経済学説の研究』有斐閣, 1956年330p
- ⁹山本七平「鈴木正三と日本資本主義の精神」『勤勉の哲学』光文社1979年62-63p
- ¹⁰大桑斉「日本近世の思想と仏教」法蔵館1989年321-327p。同『寺壇の思想』新装第1版 教育社 1985年149-151p
- ¹¹神谷満雄「鈴木正三—日本型勤勉思想の源流—」『鈴木正三研究集録』第6号, 鈴木正三研究会,

- ³¹ シュンペーターは今日では経済学のみならず、経営学の分野で多くの指示を集めている。
- ³² K. マルクス。向坂逸郎訳『資本論』岩波文庫版、第一分冊 1981年268,269p)
- ³³ 佐伯啓思『「欲望」と資本主義』講談社現代文庫1993年62p
- ³⁴ 小室直樹『経済学をめぐる巨匠たち』ダイヤモンド社2003年 168 - 169p
- ³⁵ W. ゾンバルト著。金森誠也訳『ユダヤ人と経済生活』講談社2015年
- ³⁶ W. ゾンバルト著。金森誠也訳『恋愛と贅沢と資本主義』講談社2006年
- ³⁷ W. ゾンバルト著。金森誠也訳『恋愛と贅沢と資本主義』講談社2006年258p.259P
- ³⁸ 必要性や実用的な価値だけでなく、それによって得られる周囲からの羨望(せんぼう)のまなざしを意識して行う消費行動。誇示的消費、衒示(げんじ)的消費、ブランド消費ともいう。アメリカの経済学者S・ヴェブレンが『有閑階級の理論』(1899)のなかで、ロックフェラーやカーネギーなどの産業資本家が誕生したいわゆる黄金狂時代のアメリカで横行していた「見せびらかしの消費(顕示的消費)」について言及したことから、ヴェブレン効果ともよばれる。
- ³⁹ F.ブローデル著。村上光彦・山本淳一訳『物質文明・経済・資本主義 15 - 18世紀 日常性の構造、交換のはたらき、世界時間』みすず書房1985年
- ⁴⁰ 横山源之助『日本の下層社会』岩波書店1988年232p
- ⁴¹ 孫田良平監修『賃金の本質と人事革新』三修社2007年68p
- ・海老澤有道『南蛮学説の研究』創文社 1958年
- ・海老澤有道『日本キリシタン史』塙書房 1966年
- ・近津経史「鈴木正三の職分仏行説について」『印度学仏教学研究』第12巻第2号 日本印度学仏教学会 1964年
- ・近津経史「鈴木正三への再考察」『日本仏教第20号』日本仏教研究会 1964年
- ・小笠原眞「「日本の近代化と禅宗再考」—特に鈴木正三にみる「日本資本主義の精神論」をめぐって—」『愛知学院大学『大学紀要』2007年9月
- ・大桑斉『日本近世の思想と仏教』法蔵館1989年
- ・大桑斉『寺檀の思想』新装第1版 教育社 1985年
- ・大野信三『仏教社会・経済学説の研究』有斐閣、1956年
- ・柏原裕泉「鈴木正三の庶民教化」『大谷学報』第49巻第2号』大谷大学大谷学会1969年
- ・加藤みち子『鈴木正三著作集I』中央公論社 2015年
- ・神谷満雄「郷土の偉人鈴木正三の生涯と思想の核心」『鈴木正三研究集録』第6号、鈴木正三研究会、2003年
- ・神谷満雄『鈴木正三一現代に生きる勤勉の精神一』PHP研究所2001年
- ・小室直樹『経済学をめぐる巨匠たち』ダイヤモンド社2003年
- ・小室直樹『日本資本主義崩壊の論理』光文社、1992年
- ・佐伯啓思『「欲望」と資本主義』講談社現代文庫1993年
- ・柴田実「近世世俗主義と仏教」『仏教史学』第14巻第1号、仏教史学会 1968年
- ・末本文美士『日本仏教思想史論考』大蔵出版(株)1993年
- ・鈴木正三「商人日用」『万民徳用』

【主な参考文献】

- ・家永三郎『日本道徳思想史』岩波書店1954年
- ・今井淳『近世日本庶民社会の倫理思想』理想社、1966年

- ・竹林庄太郎「鈴木正三の商業思想『同志社商学』第30巻第5・6号, 同志社大学商学会, 1979年
- ・中村元『日本宗教の近代性』（『中村元選集』第8巻）春秋社, 1965年
- ・中村元「日本仏教における資本主義の精神」『日本宗教の近代性』春秋社1965年
- ・中村元「近世日本の批判的精神」『同選集』第7巻春秋社, 1965年
- ・藤吉慈海『鈴木正三』名著普及会 1982年
- ・保坂俊司「鈴木正三思想の普遍性を巡って(その一)」『正三思想における聖業聖化の思想を中心に』-『鈴木正三研究収録』第3号 鈴木正三研究会 2000年
- ・堀出一郎『鈴木正三ー日本型勤勉思想の源流一』麗澤大学出版会 1999年
- ・孫田良平監修『賃金の本質と人事革新』三修社 2007年
- ・村田昇「鈴木正三の研究『日本仏教』第27号, 日本仏教研究会 1967年
- ・山本七平『日本資本主義の精神』光文社1979年
- ・山本七平『勤勉の哲学』PHP研究所 1979年
- ・横山源之助『日本の下層社会』岩波書店1988年
- ・Mウェーバー著。大塚久雄約『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫1989年
- ・W. ゾンバルト著。金森誠也約『ユダヤ人と経済生活』講談社2015年
- ・W. ゾンバルト著。金森誠也約『恋愛と贅沢と資本主義』講談社2006年
- ・F.ブローデル著。村上光彦・山本淳一訳『物質文明・経済・資本主義 15 - 18世紀 日常性の構造、交換のはたらき、世界時間』みすず書房 1985年
- ・K.マルクス 向坂逸郎訳『資本論』岩波文庫版、第一分冊 1981年